

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

ドリアンと森の恵み

河合文 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教)

ドリアンの季節がやってきた。マレー半島東海岸地域は、今年は果実の当たり年のようなのである。特にドリアンを待ちわびていたのは、同州に暮らすオランアスリ(先住民)「バテツ」の友人たちだ。彼らは森で得た資源の取引や狩猟採集によって生活しており、雨期は村にとどまるが、雨期が明けて川の水が少なくなると「タマン・ヌガラ国立公園」の森に移動してキャンプをする。



森で採った果実を運ぶバテツの親子 (筆者提供)

公園内にはマレー農民の果樹園跡が複数存在する。果実の多い年には、彼らはそうした場所にキャンプし、ドリアンを食べて過ごす。森にあふれるのはドリアンばかりではない。ランブータンによく似たブラサン、さわやかな香り

のランサツ、そしてフタバガキ科タンポイの仲間など、みずみずしい果肉が硬めの皮で覆われた漿果(しょうか)類も多い。毎日のように漿果の皮をむくため、皆の爪は果皮の汁で黒く染まる。

一方、ドリアンは食事としての役割も果たし、その日食べたのはドリアンだけだったという日も少なくない。ナイフの背でコンコンと叩いて良い音がすると食べごろだ。実を割って甘い果肉を取り出す。未熟なものはゆでて塩と味の素で味付けするとクリーミーな副食になり、竹筒に入れて蒸し焼きにするとわずかに香ばしく、ほんのりと甘い。

熟しすぎたものは塩を加えて発酵させると調味料トンポヤになる。川で捕った魚をこれで味付けすると、非常に美味なのだ。また種もゆでるとホクホクとして、少しぬめりのある食感になる。栄養豊富なドリアンを食べて過ごすため、この時期、多くの人はいささかよくなる。

しかしマレーシアでは毎年、同じように結実があるとは限らない。四季のある日本と比べると、植物の営みは気まぐれな印象を受ける。果実の多い年も数年おきにしか訪れない。こうしたマレーシアの自然の「気まぐれさ」は、フタバガキ科を中心とする植物の一斉

開花として知られてきた。

この一斉開花のあった年が果実の当たり年である。国際農林水産業研究センターと九州大学が中心となっていた研究によると、フタバガキ科の一斉開花は乾燥かつ低温という天候が続いた後に生じるといふ。マレー半島東海岸部では2月ごろ、北東モンスーン(季節風)から南西モンスーンに切り替わるころに雨のない日が続く。この時期の気温と雨の少なさが重要なだろう。

条件が整った時、木々は花々をつける。ドリアンの白い花房も幹にポコポコと顔を出す。バテツのように森に依存した暮らしを送るオランアスリは、この花の季節に集まり、歌や踊りで結実を祈る慣習があった。そしてその際、多くの実がこの世界にもたらされるようにと、トランス状態になったシャーマンが雷神から花を「盗んでくる」こともあったという。

現在ではこうした祭事はほとんど見られなくなったが、彼らにとって果実が重要であることに変わりはない。

特に重要なのはクワ科パンノキ属の果実である。街中で目にすることのある非常に大きな果実、ナンカ(パラミツ、ジャックフルーツ)もその仲間だ。これは料理にも使われるがインド原産である。

一方、マレー半島原産でバテツのような集団が重視するのは、チェンパダと呼ばれるコパラミツや、ムンタワというとげに覆われた、やや小ぶりの実をつける種類だ。バテツによると、神がこの世を創造する際に最初につくったのがこのムンタワだといふ。

ムンタワは未熟のものをゆでるか竹筒で蒸して食べる。加熱したものは少し酸味があってホクホクしているが全く甘くない。きっと熟した果肉は甘いはずなのに、彼らはそれには見向きもせず捨ててしまう。何とももったいないと思うのは、果実は甘いものという感覚にとらわれている私だけなのかもしれない。

< 筆者紹介 >

1983年沖縄県生まれ。マレー半島のオランアスリを中心に、人と環境の関係について研究。『川筋の遊動民バテツ：マレー半島の熱帯林を生きる狩猟採集民』(シリーズ生態人類学は挑む、京都大学学術出版会)が近日刊行。